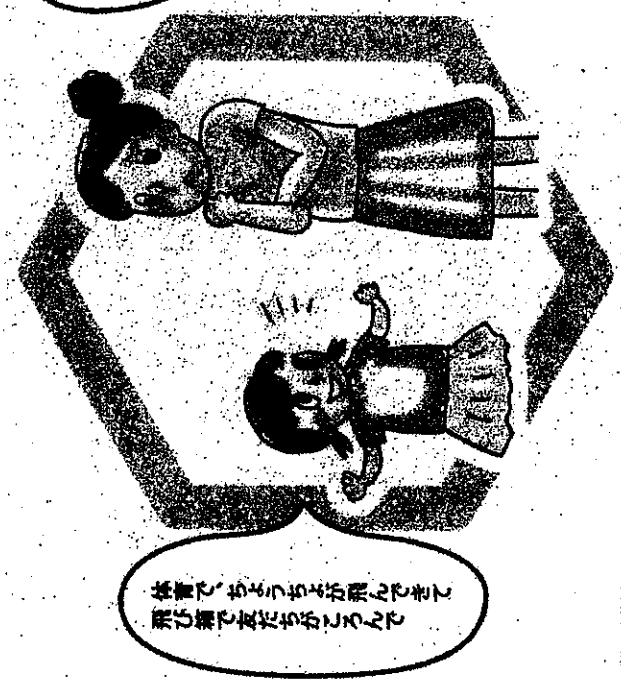
那覇市立若狭小学校　特別支援教育通信（教職員用）

特別支援だより　No.13

令和3年7月12日（月）　特別支援教育コーディネーター　松田敦子

発達が気になったら②

「言葉」という枠で比較してしまうと、「何を言っているのかわからない、ちゃんとしゃべってよ」とクラスのお友達に言われたり、とても幼い子だと厳しく評価されることが多くなります。



本人の気持ち

いいたいことが
いっぱいあるのに
なんで伝わらない
んだろう

周の気持ち

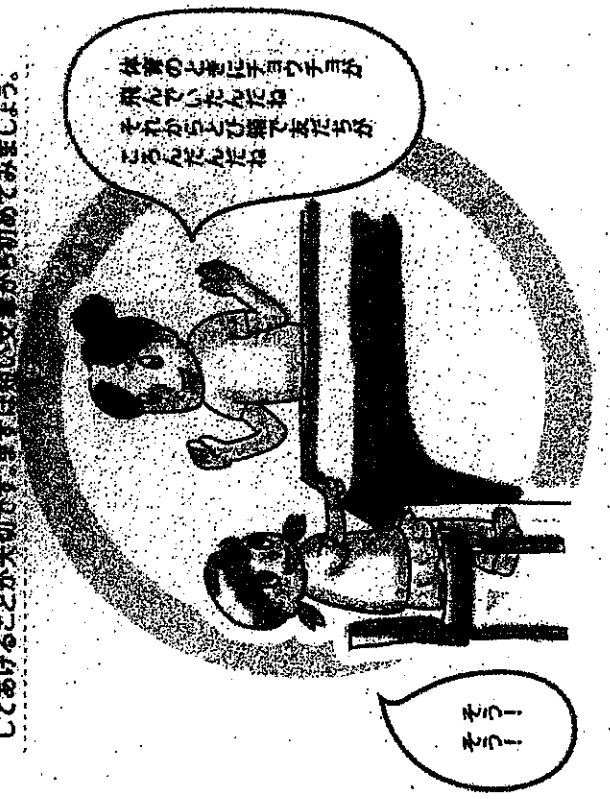
この子は、いつも
何を言っているのか
まとまらないのよ

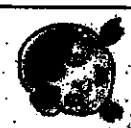
POINT

話がよく飛んでしまう子は、言いたいことがたくさんあって何からどうやって話したらいいのか頭のなかが混乱して、言葉の組立てができない状態なのです。また、話の途中から別のことを思いだして話が飛んでしまう場合もあります。

言葉が出ない子

「言葉」という枠を外してみると、伝えたいことがたくさんありすぎて何から伝えたらいいのか頭のなかが整理できていないだけなのかもしれません。本人の言いたいことをしっかり聞いて、その内容を文章にしてあげることが大切です。まずは短い文章から初めてみましょう。





本人の気持ち

そうそう
言いたいことが
伝わってうれしいよ

周の気持ち

言葉の組み合せを
一緒に考えて
あげればいいのね

POINT

「何を言っているのかわからない」と注意すると、「もう、しゃべりたくない」とか「わたしの話ってダメなんだ」と自信を失ってしまいます。本人の言いたいことを代弁し、話し言葉の組み立ての方を教えてあげることが大切です。ときには、カードやボードを使うなどして、伝わりやすい言葉の選び方を教えてあげることも有効ですね。

経験談交え 寄り添って

上野良樹

不登校を読む

小児科のカルテから ⑮

行くための学校はあっても、行かないための学校はありません。確かに、大勢の人といるのが苦手だったり、周りに合わせるのが難しかったりする子はいます。それでも、不登校になってもやむを得ない子などいないと、私は思っています。

どうすればいいのかを、子どもたちと一緒に悩んで、考えて、笑ってきました。そんな診療の中で、お母さんたちやお父さんたちに言い続けた言葉があります。「大丈夫ですよ、必ず自分から動きだします」「高校は絶対行けますよ」―。

確信ではありません。それは、子どもの持つ力への希望です。子どもの持つ回復力は、いつも医者の予測を超えていきます。ただ、そのパワーを発動しようとしても、今が安心できる状態でなければ、未来のことは考えられません。未来が語れなければ、過去から抜け出すことはできません。

せっかく学校を休むなら、少しでも明るく休みましょう。そして子どもの悩みに寄り添うように、親御さんが自らの経験を語ってください。例えば、こんなふうに。

「お父さんも昔、友達に裏切られたと思って落ち込んだけど、今はいい友達だよ」「あなたは嫌かもしれないけど、今はお母さんが友達でいいんじゃない」「誰かをいじめることでつながっているのは、友達って言わないと思うけど」「一人が好きならそれでもいいよ。お母さんもそうだったけど、結婚できたし」

悩んだり、苦しんだりしているのは、自分だけではない、まして親もそうだった―と思えることは、必ず子どもにとって力になります。

学校を休まずにすむなら、それに越したことはありません。でも不登校は、未来を閉ざすものではありません。生きる力を秘めた子どもと一緒に新たな出発を目指すことは、親にとって決してつらい作業ではないと思ってください。

（小児科医）

―終わり

イラスト・オザワミカ